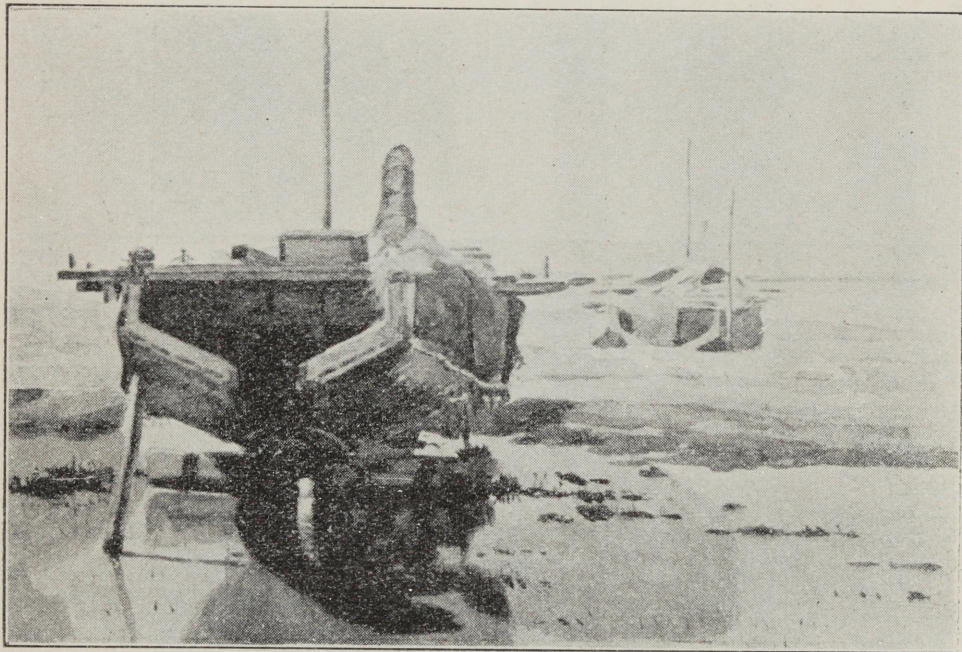


かに物の形状を成して居るのでなく、寧ろたい色を出すと云ふ目的のみである様な用筆法が最多く行はれて居るのである。私は斯様な用筆を否定するのではない。感じ心持に重きを置く畫にあつては、斯様な用筆を便とするであらう。併しながら斯くの如き用筆法は畫を柔かにする代りやゝもすれば畫を單調ならしめたる、物質の表現を妨げる。私は一筆一筆が物の形情を細かに語つて居る様な畫も欲しいのである。又粗く強い筆が一氣に引かれて、景象が大膽に捕へられて居る様な畫も欲しいのである。

着色に於ても重潤の法が多く用ひられて居る。一氣にして沫せられた快い色は殆見ることが出来ぬのである。油繪を參酌するはよいが、水繪の特質と云ふ可き透明質は保存されて欲しいのである。今度にも透明質の保たれて居るのは數點ある様に思ふ。水繪に細い光部を残すことは面倒なものであるが、手際よく行けばよい。手際が悪くてこたはりのあるよりは、具を入れたもの



で後から畫いた方が見よいのである。要するに博覽會の水繪に對する私の不服は、其處に自然が充分に寫されて居ないこと、其處に感情の欠けて居ること、其處に「スタデー」の乏しきこと等である。

水 彩 畫 研 究 所 四 月 例 會 二 等
 鈴 木 一 治 筆

橋本雅邦氏曰く「畫家には人格の修養が大切である、高尚なる製作を得んとせば、其筆者自ら其人格を高尚にせねばならぬ、畫は心の反映である、夫故に古來より畫道の法則として、心正しからざれば筆正しからずといふて痛く人格の修養を教へてゐる」云々(中學世界)

* * * * *